

平成 28 年度大学入門ゼミ実施報告書

○教育学部学校教育教員養成課程

1. 実施の概要

平成 28 年度の大学入門ゼミは、7 クラス編成（1 クラスあたり学生 23 名(1 クラスのみ 24 名)) で実施した。全学共通コンテンツについては 162 名を 2 クラスに分けて実施した。

また本年度より、1～7 組の授業教室が前期「大学入門ゼミ」のみならず、後期実施の「教職概論」(学部科目)までを通して“ホームルーム教室”となるよう、講義室調整を行った。併せて、担任教員の学生指導のクラス間連携を図るとともに、学生にも初年次教育の一体感・一貫性を感じさせるため、ホームルーム教室となる講義室を、中庭を取り囲む 4・5 号館 2 階にクラス番号順に並ぶよう集中配置して実施した（1 組 421・2 組 423・3 組 427・4 組 428・5 組 523・6 組 522・7 組 521）。本学部学校教育教員養成課程における平成 28 年度「大学入門ゼミ」のスケジュールは、表 1 のとおりである。

表 1 教育学部学校教育教員養成課程「大学入門ゼミ」スケジュール

回	実施月日（曜日）	授業内容の概要
1	4 月 11 日（月）	オリエンテーション・授業説明 学生憲章と大学生としての自覚 [全体指導]
2	4 月 18 日（月）	小豆島 一日研修 事前指導
3	4 月 25 日（月）	【共通コンテンツ】情報整理の方法
4	5 月 2 日（月）	【共通コンテンツ】レポートの書き方
5	5 月 7 日（土） or 8 日（日）	小豆島一日研修 「二十四の瞳」出会い学習 [7 クラスを 2 班に分け、日帰りで実施]
6	5 月 9 日（月）	【共通コンテンツ】日本語技法
7	5 月 16 日（月）	【共通コンテンツ】プレゼンテーションの技法
8	5 月 23 日（月）	学校参観 事前指導 [全体指導]
9A	5 月 30 日（月）	中学校参観（附高中・附坂中）
10	6 月 6 日（月）	中学校参観 振り返り [クラスごと]
11	6 月 13 日（月）	小学校参観（附高小・附坂小）
9B	6 月 20 日（月）	幼稚園参観（附幼・附幼高松園舎）
12	6 月 27 日（月）	学校教育入門 授業の基礎基本 [全体指導]
13	7 月 4 日（月）	振り返り（ブレインストーミングや KJ 法） [クラスごと]
14	7 月 11 日（月）	「大学入門ゼミで学んだこと」発表準備 [クラスごと]
15	7 月 25 日（月）	「大学入門ゼミで学んだこと」発表・まとめ

本学部学校教育教員養成課程における「大学入門ゼミ」の特徴として、「二十四の瞳」との出会い学習を組み込んでいることを挙げるができる。事前指導の際、学生に挙手を求めたところ、「二十四の瞳」の小説を読んだことのある学生やを詳しく知る学生は殆どいないようであったが、県教委の採用募集ポスターやパンフレットなどに幅広く活

用されており、いまだ包含する価値は大きい。本授業の一部に組み込んでいる小豆島での一日研修やその事前指導を通して、未来の教師を目指す1年次学生に、教師への憧れや教育への情熱を「二十四の瞳」との出会いを通して醸成させたいと考える。本活動は、地域に根ざした取り組みであると共に、地域に誇りを持って活動する学生を育成することにも繋がると考えている。



小豆島一日研修 「二十四の瞳」 出会い学習

学校園参観(中学校)

併せて本年度は、「大学入門ゼミ」の全学教員に向けたFD 授業公開を本学部教員養成課程が担う年度であった。しかしながら、授業公開依頼をいただいたタイミングが遅く、すでに共通コンテンツの授業内容を終えた後であった。そこで、今後の大学教育改善の方向性の1つである“アクティブ・ラーニング”を志向し、これまでの大学入門ゼミにおける学びを各クラスで振り返る授業回(7/4・第13回)を公開授業として設定して、学生が「大学入門ゼミ」12回の授業における学びの成果を相互交流する学習活動場面を位置づけた。また、1～7組の担任教員全員から授業公開への理解・積極的協力を得ることができ、全クラス授業公開を行った。学びの成果を相互交流する学習活動場面においては、各担任教員が主体的に授業実施の工夫を行い、{ワークシート、ホワイトボード、付箋紙と模造紙、付箋紙とホワイトボード}など、個々のクラスでバリエーションのあるツールの活用と交流手法によって、学びの成果を相互交流する学習活動が実施された。



2. 学生アンケート(共通コンテンツアンケート) 結果についての所見

平成26年度の学生アンケートに、レポートの書き方をもっと早く実施してもらいたいとの希望が多かったことから、平成27年度から1か月ほど早く実施している。そのレポートの書き方に関して、学生アンケートには「レポートの書き方が全くわからないところからのスタートだったので、ためになった」「高校と大学の違いを実感できた。レポートとプレゼンテーションは、大学に来て初めてやったのでとても助かった。」「レポートの書き方についての講義を受け、大学入学前に不安であったレポートをどのように書いていくのか、…(中略)…理解することができ良かったと思います。」「レポートの書き方は、大学に入って初めて書くことになるので、教えてもらうことでポイントを押

さえながら書いてすごく良いと思いました。」「大学に入って初めてレポート作成する中で、最初は手も足も出ず、どのように書いてよいのか分かりませんでした。しかし、大学入門ゼミでレポートの書き方を分かりやすく教えていただいて、本当によかったです。」など、高校生までとは異なる“大学生としての学び方”のスキルアップの基礎を培うことができたと思われる。

加えて、学生からは「プレゼンテーションの方法を学ぶ際に、発表してみたのがよかった。」「実際にプレゼンを実践できてよりわかりやすくプレゼンをする方法がわかってよかった」などの感想も複数寄せられた。共通コンテンツの内容を、ただ一斉講義により伝えるだけでなく、各担当教員が指導法を工夫し、「事例について実際に考えてみる」「ペアやグループごとに話し合う・伝え合う」といった、演習形式を取り入れて指導した成果として捉えられる。併せて、大学入門ゼミ全体の総括として「学んだことを整理する→発表原稿にまとめる→プレゼンテーションを行う」という学習活動を含めることにより、共通コンテンツとして学んだことを、実際に自らの学びに生かすプロセスを授業内で経験できたことも、学生の学習内容への達成感・充足感をより高めることに繋がっていると考えられる。

3. 改善すべき点等

日本語技法については、平成 27 年度を受講生から「少し難しかったところはもう少し詳しくした方がよいと思う」「(内容が多く、) 時間が足りずに駆け足になっていた」などの意見が寄せられていた。一方、本年度(平成 28 年度)を受講生からは、「日本語技法の授業で、先生へのメールの書き方を教えてもらったのが良かった。」「日本語技法では、目上の人に贈る正しいメールの打ち方を学べた。それから、サークル内でのメールのやり取りでも気をつけるようになった。」「先生へのメールの送り方を学ぶことで、目上の人への正しい言葉遣いを知ることができた点が良かったです。」「自分の知らない知識を身に付けられたこと(がよかった点)です。特に、日本語技法は使ってもいいと思っていた言葉が、使ってはいけないことであったりして勉強になりました。」など、日本語技法のコンテンツに対する前向き・積極的な意見が多く寄せられた。担当教員が授業内容を精選し取り扱ったことによって、授業の目的が明確になり、学生自身も、自らの日常生活や今後将来の生活と繋げて授業内容を捉えることができたものと考えられる。

今後とも、大学生として必要な内容の精選、本学学生の事例を挙げるなど授業法の工夫、ならびに、全学共通コンテンツ相互の連続性を持たせるなどの授業実施上の工夫を行い、学生の直近の必要性だけでなく、学生自身が「学ぶことの意味」を感じ考えられる授業を目指したい。

○教育学部人間発達環境課程

1. 実施の概要

最後にグループ発表を設定して、発表を作るために日本語表現技法や要約、引用、レポートの書き方やプレゼンの仕方などのスキルを学んでいくという形にした。

グループ発表のテーマは11のテーマの中から選択するようにした。そのテーマについて文献を指定し、要約のワークなどを1泊2日の合宿の中で実施した。合宿については予算節約のため、1日目の前半を土庄町の自由散策にした。

また施設訪問を行った方がよいという担任団の見解により、今年度は香川大学図書館に行き、その分、昨年行ったゲストスピーカの話を行わなかった。

2. 学生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

今年度は社会人としてのメールの書き方に対して、肯定的な評価が多かった。学生はLINEなどでコミュニケーションをとってメールは使わなくなっているという声も聞くのでそれが反映されたのかもしれない。

レポートの書き方については毎年、肯定的な評価が多いが、もっと早くやってほしいという意見もあるのは例年と変わらない。スケジュール上これ以上は早くできない所まで詰めているので、必要な人は教科書を見るように指示するなどの工夫を行いたい。

ワークを増やしてほしいという意見や添削の要望の意見があるので、なるべく講義をコンパクトにして作業を増やしていく方向で調整を行いたい。

3. 改善すべき点等

発表のアウトラインをつくるのが躓きの石なので、アウトラインの形式をもう少しシンプルなものにしてはどうかという教員の意見があった。後期から実施したい。

今年度はテーマについて課題図書を指定したのはよいが、最終レポートをみると、課題図書以上に読んだ文献が広まっていないことがうかがわれた。2冊目、3冊目を読むような授業設計や指導が必要である。課題図書の後にグループ分け直後に1冊読み、レポートを書くために1冊読むなど。

教科書購入してもらったのはよいが、授業のプリントはやはり散逸傾向にある。バインダーなどを渡してファイルするようにはどうかという教員の意見があった。これも後期から実施する。

メールの書き方で添付ファイル名の書き方を統一してもらえると、後でファイル管理が楽なので、指導しておいた方がよい。

レポートの書き方などは、表紙を付けるなどの形式面について不十分などの指摘が学生からあったので、ハンドブックを活用して不足を補いたい。

発表が身近な所に話が終始しがちな傾向があって、自分たちと違う世界があるという所までなかなかいかない。学問の醍醐味としてはそこにあるのだが…教え方がそうなっているところもあるし、学生だけでなく大人たちの思考も身近なところでとどまっているところもある。

○法学部

1. 実施の概要

本年度は、8クラス開講し、一学年約160名であるため、1クラス20名程度の規模で実施した。教員は分野の偏りがないよう配慮しながら毎年ランダムに割り当てられ、キャンパスアドバイザー（CA）制度と連動させることで、学生が3年次からの専門演習に入るまでの間、入門ゼミ担当者が面談等のケアをすることになる。

本年度開講されたテーマと担当者は、以下のとおりである。

- ・平和についての研究（石井 一也）
- ・人権と法（岸野 薫）
- ・法律から日常生活を考える（肥塚 肇雄）
- ・女性の視点からの法学入門（塚本 俊之）
- ・法の運用現場を学ぶ（平野 美紀）
- ・政治的思考を学ぶ（藤井 篤）
- ・法律学習への導入（村田 大樹）
- ・表現の自由について考える（山本 陽一）

入門ゼミの内容は、各担当教員が上記のテーマに沿って個別に指導をする部分と、共通コンテンツとして「情報整理の方法」「日本語技法①・②」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」を実施する部分に大別される。共通コンテンツの内容は各担当教員のシラバスにも明記し、概ね第2回から第4回までの演習で共通コンテンツの指導を終えている。

さらに法学部特有の内容としては、法学部資料室と大学図書館の利用方法の解説の回を、各クラス必ず入れている。これは、法学・政治学の学習にあたって重要な位置を占める文献資料の収集方法を初年次に身に付けさせる意図がある。また、昨年度に引き続き、大学入門ゼミの全受講生を対象に、犯罪被害者が抱える問題をテーマにした心理カウンセラーによる講演会を実施し、レポート提出を義務づけた。

2. 大学入門ゼミアンケート【学生用】（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

アンケートを通じた学生からの評価は、共通コンテンツの内容自体は、大学での学習にとって基礎的なスキルを修得する機会であり、概ね好意的な評価が多かったように思われる。ただし、担当教員によって教授方法や比重の置き方は様々であり、共通コンテンツの中身や担当教員のクラスによっては、「内容がうすい」「もっと詳しく教えて欲しい」「基本的すぎて不要」といったアンケート結果もあった。

実際には、受講学生のレベルが様々であるため、共通コンテンツに対する理解度や必要性も多様であり、アンケート結果における評価にもばらつきがある。しかし、共通コンテンツ自体は、香川大学生としてのアカデミックスキルを習得させる貴重な機会として、共通の枠組みを維持して初年次学生に対して提供することの意義は認められよう。

その際は、これまでのアンケート結果を担当者および今後担当予定の者の中で共有し、画一的な教授方法ではなく、少人数教育の特長を活かしてきめ細かな指導のあり方を検討し、実施していくことが必要と思われる。

3. 改善すべき点等

本学部において大学入門ゼミ導入当初は、一部の演習で共通コンテンツを実施せず、同コンテンツの内容を反映させた教員独自のコンテンツによって少人数教育を実施したクラスがあったものの、昨年度に続いて本年度は、全クラスで共通コンテンツの内容をシラバスに明記し、演習の中で実践することができた。これは共通コンテンツの意義や有用性が、教員間にも一定程度理解されるようになった証左であるといえよう。

ただし、各クラス別に学生に対して行った共通コンテンツのアンケート結果では、概ね好意的な評価が多かったものの、前項で指摘したような不満を抱えている学生もおり、受講学生のレベルが多様であるため全員が高い満足度を得る教育内容は難しいとしても、留意しておく必要がある。本年度は、この点を次年度以降に改善するため、学生からのアンケート結果を教員別に分けて、各担当教員にアンケート結果のフィードバックを行った。次年度以降、新たに担当予定となる教員に対しても、共通コンテンツの教授方法・内容についての心構えとして、アンケート結果の内容を共有することが有益かと思われる。

大学入門ゼミ全体に対して担当教員に実施したアンケートについても、細かなマニュアル化を望まない意見や、教員の裁量幅を大きくすべきと言った意見もあり、共通コンテンツに対する批判的な見解も残っている。しかし本学部は、基本骨格としての共通コンテンツの枠組みを維持した上で、中身の教授方法はかなり柔軟な対応を従来から認めている。今後は、先述したような学生からのアンケート結果を新規担当者とは共有しながら、新たに担当となる教員が、教授方法・内容について混乱を来すことなく、スムーズに大学入門ゼミを実施できるよう、事前の情報提供に留意することで、担当教員の不安感や不満の払拭に努めたい。

そのほか、全受講学生が対象となった講演会のあり方などは、今後の継続の必要性を含めて学部教務委員会で検討することとしたい。

○経済学部

1. 実施の概要

平成28年度の経済学部の大学入門ゼミの開講数は、前年度と同じく、18であり、1クラスあたりの受講人数は14人～20人、平均で17人であった(前期、全15回)。

授業の内容や授業のやり方においては、「共通コンテンツ」が必須教育内容として設定されているが、それ以外の授業のやり方や具体的なテーマ、テキストの選択など、細かい部分は担任教員の裁量に任されている。

2. 学生アンケート(共通コンテンツアンケート)結果についての所見

今年度の学生のアンケート結果をみると、4つの共通コンテンツのうち、「レポートの書き方」と「プレゼンテーションの方法」の項目に関する評価が、「情報処理の方法」、「日本語技法①②」の項目よりやや高いように思われる。特に「レポートの書き方」や「プレゼンテーションの方法」については、「大学入学後の早い段階で習得することができ、これからの勉学に役立つ」、「大学在学中だけでなく、社会人になっても活用できる」という返答が多数あった。

もちろん、これらの共通コンテンツの各項目に対する評価は、実際に教育に関わった各クラスの担任教員の授業のやり方や共通コンテンツの各項目への比重の置き方、さらには、受講する学生個人の基礎知識や経験などの差によって大いに左右されることを踏まえて、総合的に判断すべきであろう。

3. 改善すべき点等

教員向けのアンケートに、いくつかの改善点または要望事項があった。

(ア) 大学入門ゼミハンドブックについて：共通コンテンツを教えるにあたって、このハンドブックをうまく活用するために、①PBLのコンテンツを増やしてほしい(例えば、設定されたテーマごとに、学生に提示できる「模範解答例」をつくる)、②メールの書き方について、もう少し高いレベルの事例を用意してほしい、との要望があった。また、③ハンドブックの学生版を作成し配布する、との提案もあった。

(イ) 倫理教育や社会人としてのマナー教育も、共通コンテンツの中に盛り込むこと。

(ウ) 教員が引率する学生のフィールドワークに対し、学生に交通費の支給などの支援。

(エ) プレゼンテーション等の報告を、クラス内だけでなく、複数のクラスが合同で行うこと。

(オ) 十分な広さの講義室の確保(受講人数19人に対して、教室が狭い)。

○医学部

1. 実施の概要

(1) 実施の概要

全学生数 170 名を学生に対する希望調査により 6 ゼミに分け、教員 8 名により前期全 15 コマで行った。教員アンケートは 4 名、学生用アンケートは 124 名の回答であった。

(2) 共通教育スタンダードと各ゼミのテーマの関連・対応

共通教育スタンダード

- ①21 世紀型社会の諸問題に対する探究能力
- ②課題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）
- ③広範な人文・社会・自然に関する知識
- ④地域に関する関心と理解力
- ⑤市民としての責任感と倫理観

クラスごとに教員の専門性により、独自の下記のテーマで授業を行った。

「生物統計学超入門」（宮武ゼミ）

: 収集データのグループでのとりまとめを通して共通教育スタンダード②に対応

「医療プロフェッショナルリズム入門」（西屋ゼミ）

: グループディスカッションにより授業をアクティブラーニングの場とし、医療プロフェッショナルリズムの文脈から共通教育スタンダード①②を学んでいくことにより対応

「医療分野での X 線と放射線」（久富ゼミ）

: 学生が自ら能動的に放射線に関連する資料を調べ、試行錯誤や議論を行うことにより共通教育スタンダード②に対応

「生物多様性と実験医学」（宮下ゼミ）

: 課題発見に関して学生が自ら能動的に取り組み、グループで課題を考えプレゼンテーションを行うことにより、共通教育スタンダード①②に対応

「患者との対話から学ぶこと」（峠・石上ゼミ）

: 文献検索、プレゼンテーション技術、レポート作成方法、医療者として患者との接し方、患者を取り巻く医療や保健制度についての知識を身につけることにより、共通教育スタンダード①②③に対応

「対人援助職に求められるスキル」(清水・越田ゼミ)

: 大学履修上のマナーおよび基本的学習スキルの習得、対話的コミュニケーションの体験により、共通教育スタンダード①②⑤に対応

(3) 上記の内容についての実施形態

全学共通コンテンツに関しては、それぞれの教員の判断によりシラバスに従い、学生主体(グループワーク、学生によるプレゼンテーション等)のゼミが行われた。

各々のゼミにおいて、

- ・ 3M イーゼルパッドとカラーマジックを準備し、教室の壁に貼り付けて、各グループワークを発表して意見交換することを試みた。
- ・ ルーブリックの評価を次の回の授業でダイアグラムにして配付し、自己評価の考え方について解説した。
- ・ ゼミで学ぶべきコンピテンシーを明確化し、毎回の授業においても、どのコンピテンシーと対応するかを説明した。
- ・ 反転授業を導入し、知識の伝達は予習動画に回し、アクティブラーニングの場としてグループ討論の時間を増やした。
- ・ eポートフォリオを導入し、学生の学びを評価した。
- ・ 科学論文の引用方法、英語論文講読、情報検索、文献検索を取り入れた。といった工夫がされた。

(4) 全学共通コンテンツの部分の評価方法について

それぞれのゼミでシラバスに従い、教員の判断により成績評価の評価を行った。

2. 学生アンケート(共通コンテンツアンケート)結果についての概観

(1) 評価の高かった点

「情報整理の方法」、「レポートの書き方」、「日本語技法」、「プレゼンテーションの方法」の全てに関して、必要性が高いとの意見が多かった(以下、意見の要約)。

「プレゼンテーションの方法」

- ・ グループワークにより能動的に体系化し、発表までまとめることができた。
- ・ パワーポイント、エクセル等のツールを使う方法、発表の仕方を学べ、プレゼンテーション能力が向上した。
- ・ 自分たちが発表したいこと伝えたいことを明確にし、聞き手に理解されやすいようにプレゼンテーションを行うことの重要性、難しさを学ぶことができた。

「レポートの書き方」

・ レポートの基本的な作成方法、参考文献の引用の仕方、剽窃の注意など学べたのは有意義だった。

- ・ 大学でレポートを書く機会が多いので、入門ゼミの内容を利用することができた。

「情報整理の方法」

- ・ データの見方、統計学を学べた。

- ・講義形式に対応したノートやメモの取り方、授業の受け方を学ぶことができた。
- ・文献検索を行い、それをわかりやすくまとめるということを学んだ。

「日本語技法」

- ・メールの書き方は、まとめて教えてもらう機会が少ないので良かった。
- ・きちんとした日本語を習う機会がなかったので役に立った。
- ・コミュニケーションスキルの学習では、看護職に就く私たちに必要なスキルを学んだ。

(2) 改善すべき点

- ・レポート提出後の改善すべき点等の詳細な添削指導がないと実際にスキル取得が難しい。
- ・「メールの書き方」等の、具体的な演習の時間を増やしてほしい。
- ・「プレゼンテーションの方法」と「情報リテラシーの授業」の時期の調整をしてほしい。
- ・「文献検索」については、初年時の学生には難度が高い。

等の意見が学生より出ていた。毎年共通の課題となるが、共通コンテンツに関するスキル教育全般について具体的かつ十分な演習を行うには絶対的な時間が足りないと思われる。

3. 改善すべき点（担当教員からのコメント）等

(1) 各ゼミ参加学生の学科構成に関して

- ・医学科、看護学科の混成ゼミでは理解の差がややある。
- ・医学科の学生には、物足りなさを感じさせたように感じたので、課題内容の質を高める必要がある。

(2) 共通コンテンツの汎用性・必要性に関して

- ・学ぶべきコンピテンシーを明確化し、その評価法を確立する必要がある。
- ・レポートの書き方は文系よりの内容なので、理系学部では理系的なレポートの書き方の指導が必要である。
- ・どの学部が使用しても汎用性があるeラーニングコンテンツを作成してほしい。
- ・各コンテンツの教材を教員自らが、学部の特性や専門分野に即した作り込みを行い、充実させていく必要がある。
- ・共通コンテンツの項目としては必要のない項目もある。
- ・スキルの意義や意味を付与するような解説がさらに必要である。

(3) ゼミ担当教員の構成に関して

- ・大学の入りたての教員とベテランが組むなど教員の構成にも工夫があるとよい。

4. 医学部担当教員の授業公開

日時 平成 28 年 5 月 25 日 (水) 第 1 校時 8:50~10:20

場所 医学部小講義室D (医学部キャンパス内 講義棟 2 階)

内容 医療プロフェッショナリズムについて、基礎知識をあらかじめ予習動画で学習し、予習してきた基礎知識をもとに、対面講義ではグループディスカッションを行い、学びを深めていく。

担当教員 西屋 克己 (医学部)

○工学部

1. 実施の概要

- ・ガイダンス
- ・学部共通：安全講習（南署）
- ・学部共通：大学生活（保健管理センター）
- ・全学コンテンツ（レポートの書き方）
- ・全学コンテンツ（情報管理）
- ・全学コンテンツ（日本語技法）
- ・全学コンテンツ（プレゼンの仕方）
- ・学科ごと：グループワーク（パスタブリッジ、工作演習）を行った。

2. 学生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

①前年のアンケート結果を踏まえて、レポートの書き方を出来る限り早い段階で実施した。

その結果、参考となったという意見が多い印象であった。さらに早く対応してほしいとの意見があった。

②プレゼンの仕方、について、PPT の操作方法が具体的にわからない、プレゼンの実践の機会がなかったとの声が多い。

③レポートの書き方、プレゼンの仕方、日本語技法、それぞれ時間不足である声が多い。

3. 改善すべき点等

①可能ならば、レポートの書き方に関する講義はより早い段階で実施したい。

②PC 持ち込みにして、教員からの説明量を抑えて、実践（班員に向けた練習など）の時間を確保したい。

③宿題など時間外学習を見込んだ内容にしたい。

○農学部

1. 実施の概要

共通コンテンツの実施状況 昨年度までと同様に前半部分に集中し、後半部分は各講義独自の内容とした。合同では行わず、昨年度までの全学共通コンテンツの実施内容と問題点を踏まえ、各担当者が工夫を凝らしてクラス別の実施した。また、全学共通コンテンツの中では全てのクラスで図書館見学を取り入れ、司書の方に説明と案内をお願いした。

学部共通コンテンツの実施状況 4月の講義1週目に1泊2日の合宿形式で屋島少年自然の家において実施した。大学入門ゼミの講義担当者ではなく、1年生のアドバイザー教員が担当し、TAのサポートを得つつグループワーク（テーマを決めて議論、大学生活についてTAとの質疑応答など）を行った。

担当者間の連携の仕方 農学部では講義担当者が2年任期で交代しているが、本年度は今の担当者が2年目ということで、特に問題なく実施出来た。担当者6名のうち1名は前任者の定年退職により新たに担当することとなったが、講義が始まる前に委員による概要説明を実施し、スムーズに移行できた。

共通コンテンツの部分の評価方法について 共通コンテンツ部分だけを独立して評価することはせず、共通コンテンツで教えた内容が以後の学生達によるプレゼンテーションやレポートに反映されているかどうかを評価した。

共通コンテンツ以外の部分の実施状況 概ね7回程度を各講義題目に沿った形で学生が選んだテーマに関するプレゼンテーションに充て、活発な討論を促した。教員は、学生達の発表・討論がスムーズに進むよう、座長のような役割を果たした。

2. 学生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

例年と同様、プレゼンテーション技法とレポートの書き方に関してさらなる充実を求める意見が目立った。特にレポートについては、新学期が始まるとかなり早い段階でレポートが課されることもあり、真っ先に実施してほしいとの意見が多かった。例年ほどの辛辣な批判はなく、担当者の努力により講義内容が改善されていると推察される。